

戦前の英文ガイドブックに見る金沢(石川)の観光資源について¹

上田 卓爾

(要約)

金沢(石川)に関する記述は、現在の外国人向けの英文ガイドブックにおいては北陸三県の中でも群を抜いて多い。にもかかわらず、外国人の都道府県別訪問率では 23 位程度となっているのはなぜか。本研究においては、現在の英文ガイドブックの記述内容のみならず、これに対比するものとして、明治期から戦前にかけて発行されたいわゆるマレーのハンドブック 9 種を含む 24 種の英文ガイドブックから金沢(石川)に関する事項を網羅し、そこから外国人には過去、金沢(石川)の観光資源がどのように紹介されてきたかを明らかにしたい。

(キーワード)

都道府県別訪問率、現代の英文ガイドブック、マレーのハンドブック、マレー以外の英文ガイドブック

1.はじめに：金沢(石川)の認知度を知る

金沢(石川)は外国人にどの程度認知されているのであろうか。地元紙には兼六園の外国人入園者数が頻繁に掲載されているが、在日外国人と訪日外国人の区別もされておらず、いささか信憑性に欠けると思われる。統計資料で一応信頼できるものとしては、JNTO(日本政府観光局)による「都道府県別訪問率」があるが、これで見ると 2006 年 23 位、2007 年 23 位、2008 年 23 位、2009 年 25 位、2010 年 23 位となっており、47 都道府県でやっとな真ん中辺という低い位置にある²。上位を目指すためには何らかの改善策が必要である。

2015 年春の北陸新幹線開業にむけて、金沢(石川)の認知度向上のために観光関係者も様々な試みを実施していると思われるが、外国で出版されたガイドブックの内容の検証はなされているのであろうか。本研究はそうした現状認識ばかりでなく、これに対比するものとして、観光史の立場から、いわゆるマレーのハンドブック(初版~9 版)を始めとして、明治から第二次世界大戦終結時までに発行された内外の英文ガイドブック 24 種(うち上田所蔵にかかるもの 9 種)の記述に基づき、金沢(石川)の観光資源³が外国人にどのように紹介されてきたかを明らかにしようとするものである。

2.旅行とガイドブックについて

IT 時代とは言うものの、旅行するに際してガイドブックを全く参照しない者は稀であろう。ではガイドブックがいつごろ成立したかと言えば、よくわかっていないのが現実である。そもそも何をガイドブックと定義するかは議論の分かれるところではあろうが、旅行について書かれたものでは紀元前 3000 年頃成立した「ギルガメシュ叙事詩」、紀元前 500 年頃成立したヘカタイオスの「地誌」を始めとして、ローマ帝国が東西に分裂するまでにはずいぶんガイドブックのようなものがあったと言う⁴。旅行そのものはその後中世にはすたれ、巡礼やマイスターなどによって細々と行われていた。18 世紀にはイギリスの貴族子弟によるローマ・ギリシャを目指すグランドツアーが始まったがこれには付添があったため、ガイドブックは特に必要とされていないと思われる。大衆が参加することのできる近代的な旅行はトマス・クックが 1841 年に列車を利用した禁酒旅行に始まると一般的には言われている。従って本格的なガイドブックが出現したのもそれ以降と言って良いであろう。

3.現代の英文ガイドブックに見る金沢(石川)の観光資源

海外で発売され、外国人観光客が所持しているのをよく見かけるガイドブックには次のような観光資源が記述されている。

(図 1 英文各種ガイドブック)



(表 1)ガイドブックの内容

ガイドブック名	頁数	金沢	石川県	特記事項
<i>Lonely Planet Japan</i> ⁵	14.5 頁	長町 ⁶ 、美術館・博物館 ⁷ 、庭園 ⁸ 、東茶屋街 ⁹ 、寺町地区 ¹⁰ 、近江町市場、イベント ¹¹ 、工芸品 ¹²	能登半島(西岸 ¹³ 、能登金剛 ¹⁴ 、輪島 ¹⁵ 、珠洲・能登町 ¹⁶)、加賀温泉 ¹⁷ 、白山国立公園 ¹⁸	市内観光には 2 日。時間がなければ、兼六園・21 世紀美術館・長町・東茶屋街・近江町市場だけは見ておきたい。

<i>Michelin Green Guide Japan</i> ¹⁹	10 頁弱	★ひがし茶屋街 ²⁰ 、★大樋美術館、金沢城公園 ²¹ 、★★★兼六園、★成巽閣、美術館・博物館 ²² 、寺町地区 ²³ 、にし茶屋街 ²⁴ 、★長町地区 ²⁵ 、★近江町市場	★能登半島 ²⁶ (★輪島 ²⁷ 、★総持寺、★曾々木 ²⁸ 、禄剛崎、★能登小木)	市内観光には 2 日。見逃せないものとして、兼六園・21 世紀美術館・長町・ひがし茶屋街
<i>Eyewitness Travel Guides Japan</i> ²⁹	2 頁強	兼六園、成巽閣、金沢城、尾山神社、長町地区 ³⁰ 、美術館 ³¹ 、ひがし茶屋街 ³² 、南部地区 ³³	能登半島(輪島、舳倉島、千枚田、曾々木海岸、総持寺祖院、気多大社 ³⁴)	なし

★によってお勧め度を示す Michelin(ミシュラン)のガイドブックでは兼六園が★★★となっている。★★は 21 世紀美術館、野村家、輪島のキリコ会館である。★★★は観光資源としては日本のトップクラスのものと言える。ところが、(財)日本交通公社の『観光資源台帳』³⁵によれば、石川県全体で日本のトップクラスにあたる特 A 級の観光資源は存在していない。

同社によるランク付けは次表のとおりである。

(表 2)

ランク	内 容
特 A 級	わが国を代表する資源でかつ世界にも誇示しうるもの。わが国のイメージ構成の基調となりうるもの
A 級	特 A 級に準じ、その誘致力は全国的で観光重点地域の原動力として重要な役割をもつもの
B 級	地方スケールの誘致力をもち地方のイメージ構成の基調となりうるもの
C 級	主として県民および周辺地域住民の観光利用に供するもの

この(表 2)の「特 A 級および A 級を原則としながら、具体的には『日本に生れたからには、一生の間に是非一度は見ておいた方が良い』と自信をもってお勧めできる観光資源」を掲載したという同じ(財)日本交通公社発行の『美しき日本』³⁶では石川県全体で 4 件のみが掲載されている。すなわち、「兼六園・那谷寺・白山・金沢の街並み」だけであり、能登については B 級以下とみなされていると考えざるを得ない。ちなみに、特 A 級とみなされた 37 の観光資源をミシュランのガイドと照らし合わせてみると、★★★が 14、★★が 9、★が 2、★なし(記述なしを含む)が 12 となっており、彼我の評価の差が明らかになっている。すなわち、「見せたいもの」が「見たいもの」とは限らないのである。日本人の常識に基づいてランク付けをするのは良いが、インバウンド・ツーリズムにおいてはそれは通用

しないことを認識すべきであろう。

4.戦前の英文ガイドブックに見る金沢(石川)の観光資源

(1)明治 14(1881)年以前のガイドブック

日本に関するガイドブックの成立以前に、マルコ・ポーロの「東方見聞録」³⁷を始めとして日本に関する文献³⁸が数多く存在したことに注意すべきである。中でも重要なものはいわゆる「地誌」であって、ケンペル「日本誌」³⁹、シーボルト「日本」⁴⁰がある。ペリーも来航の際にはこの 2 書を大いに参考にしており、その意味ではガイドブックの役割を果たしていると言えるのではないだろうか⁴¹。

日米和親条約⁴²による下田・函館開港からほどなく、日米修好通商条約⁴³による 5 港(函館・新潟・神戸・長崎・横浜)開港で来日外国人が増加し、ガイドブックの必要性も出てくるのであるが、実際には外人遊歩規定があり⁴⁴、10 里四方から外は許可なく出られないことになっていたため、調査・研究もしくは療養目的で旅行免状を入手して旅行する人々以外には日本全国をカバーするようなガイドブックは必要とされなかったと思われる。また、調査・研究を目的とする旅行者、例えば明治 11(1878)年のイザベラ・バードなどは通訳および食事の支度などをするガイドを連れて旅行しており、あまりガイドブックには頼らなかった可能性も高い。実際に発行されたのは 5 種類あり、成立順に

- ①慶応 3(1867)年、デニスの「中国・日本開港地案内」⁴⁵、
- ②明治 6(1873)年、山本覚馬の「京都及び周辺名所案内」⁴⁶、
- ③明治 7(1874)年、グリフィスの「横浜案内」・「東京案内」、
- ④明治 8(1875)年、アーネスト・サトウの「日光案内」、
- ⑤明治 13(1880)年、キーリングの「旅行者のための横浜・東京・箱根・フジヤマ・鎌倉・横須賀・鹿野山・成田・日光・京都・大阪 etc.」

となっているが、これらはいずれも限定されたエリアのガイドブックであり、ほとんどが外国人居留者、もしくは短期訪日旅行者向けのものであったようである⁴⁷。

(2)マレーのハンドブック⁴⁸

トマス・クックの横浜支社が大正 3(1914)年に発行した外国人旅行者向けの簡単なガイドブック⁴⁹の中に日本に関するガイドブック類が紹介されている。トップに Murray's Guide to Japan, 9th. edition、2 番目に Chamberlain's Things Japanese があげられており、前者は 7 円 50 銭、後者は 5 円というかなり高価なものである⁵⁰。

この時点における両書の著者は B. H. Chamberlain(B.H.チェンバレン)となっているが、著者について時系列的に説明すると次のようになる。

Murray's Guide to Japan は正式名称を A Handbook for Travellers in Japan というが、この名称は 3 版からで、1881 年発行の初版、1884 年発行の 2 版は Earnest Mason Satow(アーネスト・サトウ)と A. G. S. Hawes(ホーズ)の共著で、名称は A Handbook for Travellers

in Central & Northern Japan となっており、日本全土をカバーするものではない。Murray は 19 世紀半ばからガイドブックのシリーズを出していたイギリスの出版社であり、初版は横浜の Kelly & Co. で発行されたが、Murray 社のシリーズと同様の体裁にしてあった。2 版から Murray 社の出版となって、名実ともにマレーのハンドブックと呼ばれるようになった。

3 版から A Handbook for Travellers in Japan と改称され、B. H. チェンバレンと W. B. Mason(メイスン)の共著となっており、後述のように大正 2(1913)年の 9 版まで発行されている。

B. H. チェンバレンの著書となった A Handbook for Travellers in Japan(マレーのハンドブック、3 版以降)と Things Japanese(日本事物誌)の関係は、マレーのハンドブック 3 版の前年に日本事物誌の初版が出版され、マレーのハンドブックの初版・2 版にあった「地理」「日本関係書籍」「風呂」「動物学」「植物学」の項目が日本事物誌に移されたという点にある⁵¹。

Things Japanese(日本事物誌)には金沢(石川)に関しての記述はあまりない。初版は 1890 年であるが、1939 年発行の 6 版⁵²における金沢(石川)に関する記述は僅かに 4 箇所である。

①アイヌ語について：能登半島の「NOTO」はアイヌ語の「*nottu*」岬からきているとの紹介⁵³。

②大名について：大名の最低は 1 万石の所領で最高が加賀の百万石である⁵⁴。

③地理学について：日本海に突き出た能登半島が房総半島、伊豆半島と並んで主たるものである。名前は能登も伊豆もアイヌ語の岬による、としている⁵⁵。

④陶磁器について：瀬戸・薩摩の他の陶磁器の産地として、長く浮き沈みの激しい歴史を経て現在は赤と金で豊かに装飾された九谷焼の産地である「加賀」⁵⁶。これだけであり、交流のあったパーシバル・ローエルの著作は紹介されているが、「能登」は含まれていない。

マレーのハンドブックの初版から 9 版までは、各版ともに A5 版・2 段組になっており、幾つかの目的地をまとめた旅程(ルート)にナンバーが付してある。ルート毎の記述行数、石川全体の記述行数、金沢単独の記述行数、金沢以外に記された地名などの概略は(表 3)のようになっている。国立国会図書館には 9 版しか所蔵されていない。自分で所有する 3 版以外は横浜開港資料館所蔵の各版を複写した。但し、開港資料館所蔵の 9 版には金沢を含むルート部分が欠落しており、その部分は国会図書館の 9 版を複写した。

(表 3)

	ルート	a 総行数	b 石川行数 b/a(%)	c 金沢行数 c/b(%)	金 沢 以 外 の地名	その他
初版・1881	No.27	618	239・ 38.7%	38・ 15.9%	津幡・七尾・松 任・水島・寺井・ 小松・月津・動 橋・作見・大聖寺	

2 版・1884	No.31	1,119	403 ・ 36.0	105 ・ 26.1	津幡・七尾・松 任・水島・栗生・ 寺井・小松・月 津・動橋・作見・ 大聖寺	鶴来・女原・牛 首・湯本(白山登 山ルート) 1884 長浜・敦賀 開通
3 版・1891	No.33	395	89 ・ 22.5	51 ・ 57.3	大聖寺・小松・ 松任・七尾	米原・敦賀間 鉄道利用 ローウェルの「能 登」を引用
4 版・1894	No.33	329	85 ・ 25.8	41 ・ 48.2	大聖寺・小松・ 松任・津幡・七 尾	
5 版・1899	No.46	357	105 ・ 29.4	50 ・ 47.6	大聖寺・小松・ 松任・津幡・七 尾	1896 福井まで 1898 金沢まで 北陸線延伸
6 版・1901	No.42	388	115 ・ 29.6	48 ・ 41.7	大聖寺・動橋・ 松任・津幡・七 尾	1898 津幡・七 尾(七尾鉄道) 1899 富山まで 北陸線延伸
7 版・1903	No.43	468	190 ・ 40.6	47 ・ 24.7	大聖寺・松任・ 津幡・七尾	
8 版・1907	No.47	469	192 ・ 40.9	48 ・ 25.0	大聖寺・松任・ 津幡・七尾	
9 版・1913	No.46	410	173 ・ 42.2	51 ・ 29.5	大聖寺・美川・ 松任・津幡・七 尾	

各版の記述内容はおおよそ次のとおりである。(表 3)からも明らかなように、初版、2 版の記述行数が非常に多い。理由はルートが高田(新潟県)を起点とし、鳥居本(滋賀県)を終点にしているためである。3 版以降はルートも敦賀から直江津までとなり、各版の記述内容も大幅には変わっていないため、前の版との主な変更点を記すこととする。

①初版：明治 14(1881)年発行。ルートはNo.27、「高田(TAKATA)から越中・加賀・越前を経て近江鳥居本まで(北国街道)⁵⁷⁾」となっている。

石川および金沢に関する記述は次のとおりである。

「加賀の国に入るには、俱利伽羅峠を越えて竹橋(Take-no-hashī、現津幡町)に下る」⁵⁸⁾津幡から七尾までのルートも紹介されている。「妙観寺(院)からの湾の眺めが良い」⁵⁹⁾津幡から金沢へは街道の松並木と河北潟が記されている。

「金沢⁶⁰は人口 11 万、前田家 102 万 2,700 石の城下町であったが、現在は石川県の首都である。道路は広くて清潔で街中には樹木の植えられた庭園が数多くあり、高所からの眺めは絵のようである」⁶¹「城は広く、美しく、軍隊の司令部として使用されている」⁶²「浅野川・犀川が町を流れ、夏の夜は岸边はベンチやテーブルで埋まり、住民がお茶を飲んだり、涼んだりしている」⁶³

名物としては九谷焼と金銀の象嵌、扇子、薬。絹の製糸所も記述がある。

次に、白山登山の案内がなされている。

「金沢から白山頂上まで 19 里。白山頂上からの立山・槍ヶ岳・乗鞍・甲斐駒・駒ヶ岳の眺望は壮大である」⁶⁴

松任：油・絹・染物・綿製品を産する。

手取川：水源から河口まで詳しく書かれている。

寺井：九谷焼の産地。陶石は九谷および鍋谷から運ばれている。

小松：人口 1 万、今江潟、木場潟、柴山潟の加賀三湖⁶⁵の記述がある。

山代・山中温泉も記されている。

月津・動橋・作見は「みずばらしい村であるが、丘陵地の斜面には道路面まで茶・桑が植えられている」⁶⁶と記されている。

大聖寺は人口 9,500 人、松平飛騨守 10 万石。加賀・越前の国境がある。

②2 版：明治 17(1884)年発行。ルートはNo.31。起点も終点も初版と変わらない。初版と比べて金沢の記述が非常に詳しいのが目立つ。兼六園の六勝⁶⁷の説明もあり、日本武尊像・勸業博物館・異御殿(現成異閣)・尾山神社の神門にいたるまで行数にして 105 行で説明されている。また、白山登山についても倍の記述がなされている。なお、金沢は別ルートNo. 34 金沢から飛騨高山までの起点としても記述されている。

初版・2 版とも高田からの旅程になっているのは、まだ北陸に鉄道が敷かれていなかったためである。初版発行の 1 年前、1880 年にはやっと京都から大津までが開業し、神戸・大阪(1874)、大阪・京都(1876)とあわせて神戸・大津間が結ばれたばかりであった。2 版の 1884 年までには 1882 年に大津・長浜が太湖汽船によって連絡されており、1883 年には長浜・関ヶ原、長浜・敦賀が開業しているといった状況である⁶⁸。

③3 版：明治 24(1891)年発行。1893 年のものもあるがこれはニューヨークで発行されたものである。ルートはNo.33 で、「西海岸、敦賀から直江津まで」と題されている。1889 年に東海道線が新橋・神戸間全通となっているため、米原・敦賀間は鉄道で、また敦賀・坂井(三国)間には汽船の便も記述されている。七尾については伏木からのルートに変更されている⁶⁹。また、パーシバル・ローウェルの「NOTO」を引用して、和倉温泉も紹介されている⁷⁰。但し、金沢の紹介は 2 版に比べて激減しており、行数にして 51 行となっている。さらに記述上の大項目として大聖寺・小松・松任・金沢・七尾があげられ、津幡等の名前が削除されている。別ルートNo.34 で金沢から飛騨高山までの起点としても記述されている。

④4 版：明治 27(1894)年発行でルートはNo.33。別ルートNo.34 金沢から飛騨高山までの起

点としても記述されている。大項目は大聖寺・小松・松任・金沢・七尾と3版と変わらないが、大聖寺の項に1867-1873のキリシタン流刑についての記述が新たに加えられている⁷¹。また松任に「加賀の千代女」の誕生の地として有名と記述されている⁷²。金沢の末尾に良い宿(複数)のある「中山温泉」と書かれているが、該当する温泉が不明である。

⑤5版：明治32(1899)年発行でルートはNo.46となっている。北陸線は1896年に敦賀から福井まで、1898年に金沢まで延伸したので「京都から金沢まで汽車で来られるようになった」⁷³。ただ、ルートの起点は米原からとなっている。別ルートNo.36で飛騨高山および白山登山の起点としても記述されている。大聖寺と小松は大項目から外れてはいないが、「泊まるなら山代温泉がお奨めである」⁷⁴としている。金沢の記述でも「大乘寺山の春は遅い雪解けのために梅・桜・桃の花が一斉に咲くのでピクニックリゾートとしても素晴らしい」⁷⁵とあるが、現在の大乗寺丘陵公園のことであろう。「犀川上流の用水取入れ口は300年前に建設されたもので一見の価値あり」⁷⁶とされており、おそらく大野庄用水と思われる。津幡が七尾鉄道の起点として、再び登場している。七尾の項目では和倉温泉の記述があり、「和倉の向こうは訪れる外国人も興味を引かないだろう」⁷⁷、などと記述してある。

⑥6版：明治34(1901)年発行。項目から小松が削除され、代わりに動橋が記載されている。至近の温泉地として片山津がこのシリーズ初登場である。しかしながら「暑くて、蚊が多い」との評で山代温泉の方が山の麓にあって涼しいとしており、さらに初登場の山中温泉がこの三者ではベストだとしている⁷⁸。金沢の記述は5版と変わらない。別ルートNo.31で飛騨高山および白山登山の起点としても記述されている。

⑦7版；1明治36(1903)年発行。2年足らずの間に記述がだいぶ変わり、「動橋を過ぎると車窓から白山の三つの峰が良く見える、小松を過ぎれば手取川河口の海岸線が見え、まもなく美川に。これからまた陸地側を走る」⁷⁹、とある。山中温泉の黒谷橋とこおろぎ橋が初登場、まだ日下部鳴鶴の名前にかけた鶴仙溪という名称になる前である。さらに、山代近傍の名所として那谷寺・栗津温泉も初登場。九谷焼の歴史が32行にもわたって紹介されており⁸⁰、ちょっと最近のガイドブックにも負けていない。金沢の名産(お土産)は九谷焼・象嵌が不動の地位を占めている。別ルートNo.28で飛騨高山および白山登山の起点としての金沢も変わっていない。

⑧8版：明治40(1907)年発行。ルートがNo.47に変わった以外は特に目新しい記述はない。金沢土産に扇子が追加された⁸¹程度である。

⑨9版：大正2(1913)年発行。ルートはNo.46になっている。片山津が山代近傍の那谷寺・栗津と並べて紹介されており、若干格下げの気味がある。また、美川の海水浴場が紹介されている⁸²。海水浴場の紹介は初めて。さらに野田山の墓地と眺望の記述がある⁸³。この版では飛騨高山・白山登山の起点としてのルートは削除されている。

(3)マレーのハンドブック以外の英文ガイドブック

時系列的に列挙すると次のようになる。

① *MAP OF JAPAN FOR TOURISTS*: 明治 30(1897)年発行。明治 26(1893)年に渋沢栄一や益田孝らによって喜賓会(The Welcome Society of Japan)という組織が設立されている。日本にやってくる外国人の観光に対して便宜を図り、普通では観光できないようなところも紹介しようという団体であった。そこが作製した外国人むけの日本地図(英語版)である。時期的にはマレーのハンドブックの 4 版と 5 版の中間にあたる。残念なことに能登の地名がかなりいい加減で、宇出津^{ウツ}が(Udetsu)、羽咋^{ハクイ}が(Hagui)、富来^{トキ}が(Tomiki)などと書いてある。表表紙に富士山、裏表紙は日本髪的女性が描かれている。

② *TO NIPPON, THE LAND OF THE RISING SUN*: 明治 32(1899)年発行、マレーのハンドブックの 5 版と同年。日本郵船が豪州航路を開設したのを機に、オーストラリアの旅行家に書かせた、オーストラリア人向けの日本のガイドブックである。タイトルが JAPAN でなく NIPPONなのは発行元が NIPPON YUSEN KAISHA だからであろう。残念ながら金沢には足を延ばしてはいないが、鉄道地図が巻末にあり、小松・金沢・津幡・七尾の名前が読める。七尾鉄道の開通まで記載されている⁸⁴。

③ *Handbook for Tourists in Japan*: 明治 36(1903)年発行。神戸の東洋通弁協会が発行した簡単なガイドブックである。北陸線が米原・富山間 153.1 マイルであること、石川県の人口が 751,320 人であること、白山の高さが 8920 フィートであること⁸⁵、しか書かれていない。

④ *A Useful Notes and Itineraries FOR TRAVELLING IN JAPAN*: 明治 38(1905)年初版。日本語名は「英文日本旅行方案書」となっている。喜賓会発行の英文ガイドブックである。喜賓会はこれより先、明治 34(1901)年に英文ガイドブックを出版しようとしていたようで、「明治三十四年第一版英文日本案内作製の事となり上梓されたが、チェムバーレン及メーソン氏の抗議に由り未刊行に終わった。」という指摘がジャパン・ツーリスト・ビューローの『回顧録』にある、但し事実かどうかは明らかでない⁸⁶。3 円払って喜賓会の会員になる⁸⁷と紹介してもらえる場所の一つに Medical School (Kanazawa, Kaga Prov.)⁸⁸とあり、これは明治 36 年の勅令第 61 号による「金沢医学専門学校」であろう。鉄道路線図もあり、大聖寺・金沢・津幡・高松・羽咋・七尾の名が見られるが、羽咋^{ハクイ}が HAGUI となっていてところが残念である。2 週間、3 週間、4 週間、3 つのお奨めコースがあり⁸⁹、金沢は 2 週間コース、横浜から神戸のルートに登場する。名古屋から京都が 10 日目に設定されているのであるが、米原からのサイドトリップのような形で紹介されている。「金沢は日本で最もよく知られた景色のよい庭園の一つがある」⁹⁰。これだけの記述である。

⑤ *AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA*: 大正 3(1914)年発行。鉄道院が出版した、いわゆる『東亜英文旅行案内』で、金沢(石川)が登場するのは第 3 巻、北東日本である。鶴見祐輔によれば、「普通の案内記と異なる遠大な計画であった。ドイツの『ベデカー案内記』に範を取ったけれども、その構想はベデカーより遥かに雄大であった。(中略)美術、哲学、文芸、茶の湯、庭園、演劇、能狂言のごとくにいたるまで、日本の特色を各方面から委曲に説明して、文化的色彩を濃厚に盛り上げたものであった。(中略)その予算は二〇

万円を越ゆる巨額であった。この事業のために、人を各地に派して、実地について材料を収集せしめ、まず日本文をもって執筆した後最も懇切に英文に翻訳せしめ、英人二名の校閲を経て印刷した。」⁹¹というが、金沢(石川)の記述を見る限り褒められたものではない。分量こそルートNo.37 全体の 23 ページ中 10 ページと確かに多いが、タイトル部分からして北陸線を「The Hokuroku Line」⁹²とは旧弊すぎる。浅野川は全 2 か所とも「*Amano-gawa*」⁹³になっており、兼六園を日本三名園の一としつつも、他を後樂園および栗林公園としたうえ、「*Kuribayashi Koen*」⁹⁴とし、さらに西南の役を 1897 年⁹⁵と 20 年も誤り、上杉謙信が卯辰山に築城したとの珍説⁹⁶が飛び出すに至っては「実地について材料を収集せしめ」たとは到底信じがたい。写真の位置も文章とはマッチしていない。兼六園の写真は記事の 5 ページも前の部分に掲載され、白山の登山ルートの記事中に 7 ページ後の親不知の写真が掲載されているのは「校閲を経て印刷」されたものとは言い難い。

金沢の名所としては金沢城跡、兼六園、尾山神社、卯辰山、天徳院、野田山、東西本願寺別院、大乘寺、金石があり、県内の記述は大聖寺・山中温泉、動橋・片山津温泉、栗津、小松・安宅閣、津幡・河北潟・倶利伽羅峠、千路・邑知潟、七尾・生国玉比古神社・七尾城跡・能登島・和倉温泉・内浦街道・総持寺、輪島がある。白山の登山ルートとして 2 ページ割いており、コラム記事で九谷焼・金沢塗・銭屋五兵衛が書かれてある。

⑥ *TERRY'S GUIDE TO THE JAPANESE EMPIRE*: 大正 3(1914)年初版。「テリーの日本帝国ガイド」と呼ばれている。初版以外には 1920 年版があるようだが、国会図書館には 1930 年版しかない。内容は 1930 年版によるが、やはりルートに番号が付けてあって金沢はNo.32、「米原から敦賀・福井・金沢・津幡(能登半島)を経て直江津へ」に登場する⁹⁷。石川県は大聖寺に始まって山代温泉・山中温泉と続き、「幾つかの温泉では混浴になっているので旅行者は驚くであろう」⁹⁸、などと書かれている。白山については少ない記述の中で細かい文字ながら 20 数行も書かれている。金沢については簡単ではあるが、「九谷焼の産地であること、兼六園が日本帝国でも最高の庭園の一つであり、時間があればぜひ拝観して園内の人工の小山(福寿山)からの市内の眺望を楽しむべきである」⁹⁹と書かれている。金沢が 17 行で済まされているのに対し、能登は七尾を始めとして和倉温泉など細かい文字ながら 12 行も書かれている。七尾城を築いた畠山満慶(みつのり)の名前まで書かれているガイドブックは本稿で取り上げた中ではこれ一つである。しかし、七尾城の築城を 1398 年としていて、少々古すぎると思われる。ここでも誤字があり、輪島が *Wajimi* と書かれている¹⁰⁰。

⑦ *POCKET GUIDE TO JAPAN*: 大正 14(1925)年発行。鉄道省¹⁰¹・旧 JTB(ジャパン・ツーリスト・ビューロー)・日本ホテル協会の連名で発行。Along the Japan Sea というタイトルの青森から下関までの旅程で石川県は紹介されているが、*Wagura* とする誤りもある。金沢の人口を 29,287 人と誤ったのも根拠が不明である。兼六園を *Kenroku-Koen* としているほか、大聖寺を起点として温泉地山中・山代・栗津・片山津を紹介している¹⁰²。

⑧ *Fascinating Features of Fair Japan*: 昭和 5(1930 年)出版。鉄道省が発行したアルバム

で、表紙には JAPAN と書かれているのみである。すべて光村原色版印刷所によるカラー写真 64 葉の 7 枚目にある「本物の日本庭園」の写真は兼六園とは異なるように思われる。末尾の鉄道地図には金沢と津幡のみ記されている。

⑨ *AN OFFICIAL GUIDE TO JAPAN*: 昭和 8(1933)年出版。上記 4.(3)⑤の *AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA* の日本の部、すなわち第 2 巻および第 3 巻を改訂かつ短縮したものである、と序文にある。4.(3)⑤について指摘した誤りはほとんど訂正されているが、「上杉謙信が卯辰山に築いた城跡のことが書かれている」¹⁰³としているのにはやはり疑問が残る。

⑩ *The LURE of JAPAN*: 昭和 9(1934)年発行。国際観光協会編。紹介してある大都市は、東京・大阪・京都・奈良・名古屋・神戸・横浜であって、金沢は Other Great City として面積と人口のみが記されている。「歴史的に見ても、自然の美しさにしても 7 つの都市に劣らない」、と言い訳しているところが面白い。¹⁰⁴

⑪ *We Japanese*: 昭和 9(1934)年 1 巻初版発行、昭和 12(1937)年 2 巻初版発行。箱根富士屋ホテル発行。二代目社長の山口正造が外国人客の質問に応えるために作成した。因幡の白兎の話の鱈を誤訳して CROCODILE とするなどおかしいところもある。石川関係では陶磁器で九谷焼と温泉で山中温泉だけが書かれている¹⁰⁵。

⑫ *POCKET GUIDE TO JAPAN*: 昭和 10(1935)年発行。上記 4.(3)⑦の *POCKET GUIDE TO JAPAN* の 1935 年版であるが、国際観光局の発行となっている。序文に「更に詳しい旅行案内については、鉄道省の『Official Guide to Japan』かジャパン・ツーリスト・ビューローの『How to see』シリーズを参照されたい」¹⁰⁶と断り書きがある。巻末の地図からは、大聖寺・粟津・山中・山代・金沢・津幡・羽咋・七尾・和倉の名前が読み取れる。

⑬ *HOW TO SEE KANAZAWA and Environs*: 昭和 11(1936)年発行。ジャパン・ツーリスト・ビューローの発行。全部で 13 頁の内容はまず序文が金沢の沿革から始まり、金沢人の教養たる能・華道・茶道について述べる他、金沢の由来となった芋掘り藤五郎伝説までに及んでいる¹⁰⁷。アクセスの中に、珍しいことに航空機利用のアクセスが書かれている。もちろん、昭和 19 年にできた小松飛行場ではなく、昭和 9 年にできた富山飛行場である¹⁰⁸。航空会社は日本航空輸送会社、使用機材は 6 人乗りの中島フォッカー・スーパーユニバーサル陸上旅客機で、4 月から 9 月まで運航したことになっている。これにはエア・ガールは搭乗していない¹⁰⁹。金沢市内および周辺部では兼六園・成巽閣(目下非公開とある)・金沢城跡・尾山神社・能楽堂・卯辰山公園・東別院・尾崎神社・持明院・粟ヶ崎遊園(浅野川電鉄)・濤々園(金石電鉄)・湯涌温泉の記述がある。能登半島のツアーとして、和倉温泉・輪島・舳倉島の記述がある。周辺の温泉および都市としての記述は、宇奈月温泉・鐘釣温泉・富山市・大牧温泉・粟津温泉・片山津温泉・山代温泉・山中温泉・芦原温泉・永平寺・那谷寺(NATAJI と書いてある)である。

⑭ *JAPAN FOR THE YOUNG*: 昭和 12(1937)年発行。中扉には Board of Tourist Industry(国際観光局)と書かれているが、奥付では国際観光協会の発行となっている。分

かりやすい英語で書かれた日本の概説書と言えよであろう。金沢の案内はないが、付録の地図に大聖寺、栗津、山代、山中、金沢、津幡、羽咋、七尾、和倉、輪島の地名が読める¹¹⁰。

⑮ *PETIT GUIDE DU JAPON*: 昭和 14(1939)年発行。4.(3)⑫のフランス語版である。これにも金沢は記述がない。序文に「この本に掲載されていない旅行案内については、鉄道省の *Official Guide to Japan* か、国際観光局監修のツーリスト・ライブラリー、ジャパン・ツーリスト・ビューローの *How to see* シリーズを参照されたい」と断り書きがある¹¹¹。巻末の地図からは、大聖寺・栗津・山中・山代・金沢・津幡・羽咋・七尾・和倉の名前が読み取れる。

5.まとめと今後の課題

マレーのハンドブック 9 種とそれ以外のガイドブック類 15 種の概要を述べてきたが、総括すれば、金沢(石川)の観光資源は明治 14(1881)年頃からある程度外国人には認識されていたといえることができる。マレーのハンドブックはページ数の増減はあるものの、版が変わるごとに少しずつ新たな観光資源の記述を増やしている。例えば大聖寺のキリシタン流刑者・加賀の千代女・大乘寺丘陵・大野庄用水の取水口などがそれである。温泉も観光資源として評価されるようになり、特に 20 世紀に入ってから記述も増え、山代・山中に次いで片山津、栗津も紹介されるようになった。能登も決して抜かされてはいない。記述は次第に少なくなってきたが、初期には白山登山の起点としての記述があった。「テリーの日本帝国ガイド」もそれなりに、外国人観光客にとっては有効な情報源であったといえる。

それに対し日本人によって書かれた英文ガイドブックは、対象を金沢(石川)に絞った 4.(3)⑬の *HOW TO SEE KANAZAWA and Environs* 以外は通り一遍で平板な印象しか与えない。その原因として、日本人である英文ガイドブック製作者が金沢(石川)の観光資源をよく把握していなかったことが考えられる。また別の観点からすれば、地元が観光資源を十分に認識せず、国内を含めた対外的な発信を怠っていたことのあらわれではないだろうか。都道府県別訪問率で中程に甘んじている事実はそのような傾向が現在も受け継がれていることを示すものではなかろうか。

インバウンド・ツーリズムの重要性が説かれる今こそ、戦前に外国人に訴求してきた観光資源の価値を改めて見直すべきではないか。また、過去日本人に対してのみ訴求してきたと思われる観光資源については、それを外国人に対しても広げるべきではなかろうか。

今後は鉄道省の『日本案内記』などから隠れた観光資源を掘り起こしてみたいと考える。

(注)

¹ 本稿は 2013 年 7 月 6 日の公開講座「学都石川の才知」での講演、『戦前の英文ガイドブックに見る金沢(石川)の観光資源』～金沢は外国人にどのように紹介されていたか～をもとに執筆したものである。

² もっとも、JNTO 調査は、『訪日旅行を終え、新千歳、仙台、成田、羽田、中部、関西、福岡、

那覇の各国際空港および博多港から出国しようとしている、滞在期間が2日以上90日以内の外国人旅行者』を調査対象としており、国際線が開設されている小松空港、富山空港は含んでいないため正確さに欠けるとは言えるが、『訪日外国人旅行者全体の約90%以上に上る』となっており、概ね信頼できる数値と見てよいであろう。

³ 本稿では観光資源の訳語として *tourist attractions* を用いた。観光学辞典(同文館、2002、8版)や観光学大事典(木楽舎、2007)では *tourist resources* を使用しているが、海外の観光学の教科書では多く *tourist attractions* を用いているため、これに準拠することとした。

⁴ 参考文献1、pp.11~32、図版も多く掲載されている。

⁵ 参考文献2

⁶ 野村家・老舗記念館・友禅館

⁷ 21世紀美術館・能楽美術館・伝統産業工芸館・蓄音機館・県立美術館・中村記念美術館・本多蔵品館・大樋美術館

⁸ 兼六園(成巽閣も付記)・玉泉園(金沢城公園は歴史的建造物に分類)

⁹ Geisha House として志摩・懷華樓、金銀箔工芸さくだ、東湯(2011年10月に箔一東山店に改装、古い情報のままである。)

¹⁰ 妙立寺・九谷光仙窯

¹¹ 加賀鳶出初式・浅野川園遊会・百万石まつり(パレードとして紹介)

¹² 金沢及び輪島塗(山中塗は記述なし)・大樋焼・九谷焼・加賀友禅・金箔。江戸時代に前田家が各種工芸品の育成に力を入れたことをイタリア・ルネッサンスの芸術家のパトロンであったメディチ家になぞらえて紹介している。

¹³ 喜多家・千里浜なぎさドライブウェイ・妙成寺

¹⁴ 総持寺祖院

¹⁵ 輪島漆芸美術館・キリコ会館、イベントとして御陣乗太鼓名舟祭・輪島大祭

¹⁶ 千枚田・曾々木海岸・時国家(時国家と上時国家と記述)

¹⁷ 九谷焼美術館・全昌寺・山中温泉(芭蕉に因んだ菊の湯、蟋蟀橋と綾取り橋の間の鶴仙溪)・山代温泉(古総湯と総湯)

¹⁸ 富士山と等しく古来信仰を集めたとし、夏のご来光、冬のスキーと温泉を勧めている。

¹⁹ 参考文献3。Guide Vert と同様にお勧めの場所を順に★★★・★★・★マークで表示。

²⁰ ★志摩・★懷華樓、金銀箔工芸さくだ、福嶋三絃店

²¹ 石川門のみ★

²² 県立美術館・伝統産業工芸館・歴史博物館・県立美術館・県立能楽堂・★★21世紀美術館・能楽美術館

²³ ★妙立寺

²⁴ 資料館・★九谷光仙窯

²⁵ ★★野村家・★老舗記念館・友禅館

²⁶ エクスカーション(小旅行)として紹介。

²⁷ ★朝市・輪島港・★輪島漆器会館(漆芸美術館とは異なる)・★★キリコ会館

²⁸ ★海岸線・下時国家・上時国家

²⁹ 参考文献4。頁数の割には詳しいが、ひがし茶屋街を示す絵地図には三味線の代わりに五弦琵琶が描かれており、知識レベルの低さが感じられる。

³⁰ 野村家・友禅館

³¹ 21世紀美術館・伝統産業工芸館・県立美術館・本多蔵品館

³² 志摩・福嶋三絃店・金銀箔工芸さくだ

³³ 妙立寺・九谷光仙窯

³⁴ 日本最古の相撲土俵がある、と記述されている。

³⁵ 参考文献5

³⁶ 参考文献6、p.200

³⁷ 成立1477年頃

³⁸ ニッポナリア(京都外国語大学図書館スペシャル・コレクション)が詳しい

³⁹ 英語版1727年、ドイツ語版1779年

- 40 成立 1832~1851 年
41 参考資料 7
42 嘉永 7(1854)年
43 安政 5(1858)年
44 明治 32(1899)年に廃止
45 これが最古の英文による日本のガイドブックとされている。
46 新島八重の実兄。この本は八重が活字を拾ったと言われている。
47 参考資料 8 に詳しい。
48 トマス・クック社は Murray's Guide としているが、通称マレーのハンドブックと日本語でも言われている。
49 参考資料 9、p.10 Guide Books and Maps
50 参考資料 10、p.399 当時の帝大生、早大生の授業料が月額 4 円 50 銭であった。
51 参考資料 11、p.227 本書は原書の抄訳であり、全 68 ルートのうち東京・横浜中心の 5 ルートしか紹介されていない。金沢(石川)は 33 番目のルートであって、本書には訳がない。
52 参考文献 12
53 参考文献 12、p.20
54 参考文献 12、p.126
55 参考文献 12、p.229
56 参考文献 12、p.419
57 参考文献 13、p.255
58 参考文献 13、p.257
59 参考文献 13、pp.P257-258
60 参考文献 13、p.257、宿は「To-ichi-tei」
61 参考文献 13、p.258
62 参考文献 13、p.258、これは明治 8 年から駐屯の歩兵第七連隊のことであろう。
63 参考文献 13、p.258
64 参考文献 13、p.258
65 参考文献 13、p.259、今江潟は 1952~1969 の国営干拓事業で全面干拓されている。
66 参考文献 13、p.259
67 参考文献 14、p.300、命名者を誤って Mayeda 定信としてはいるが、size : 宏大、pleasing appearance : 幽邃、labour bestowed : 人力、air of antiquity : 蒼古、running water : 水泉、charming view : 眺望と紹介されている。
68 鉄道網の建設状況については参考文献 15 および 16 による。
69 参考文献 17、pp.227-230
70 参考文献 18、p.111、邦訳では「和倉温泉はすでに見られてはいるが、見る価値を欠くという理由で、この二つの分類に跨っているように思われる」となっている。
71 参考文献 19、p.259。実際には明治 3 年 1870 に長崎県浦上の信徒 566 人が金沢藩送りとなり、大聖寺に送られたのは 50 人であった。
72 参考文献 19、p.259
73 参考文献 20、p.401
74 参考文献 20、p.403
75 参考文献 20、p.403
76 参考文献 20、p.403
77 参考文献 20、p.403
78 参考文献 21、p.406
79 参考文献 22、p.404
80 参考文献 22、pp.403-404
81 参考文献 23、p.399
82 参考文献 24、p.390
83 参考文献 24、p.390

- 84 参考文献 25、p.126 と p.127 の間の GENERAL RAILWAY MAP。序文に *Things Japanese* および *A Handbook for Travellers in Japan* を参考にしたことが述べてある。
- 85 参考文献 26、各々 p.27、p.59、p.60
- 86 参考文献 27、p.244、例えば「外人案内業者」の項における開誘社、東洋通弁協会の設立年等の裏付けを示すものがなく、資料としては信頼度の低いものと判断せざるをえない。当該部分も当時の新聞記事では確認できていない。
- 87 参考文献 28、p.IX
- 88 参考文献 28、p.XVII
- 89 参考文献 28、pp.(1)-(30)
- 90 参考文献 28、p.(11)
- 91 参考文献 29、pp.237-238、著者は鉄道院総裁であった後藤新平の女婿である。
- 92 参考文献 30、p.236
- 93 参考文献 30、p.246
- 94 参考文献 30、p.247
- 95 参考文献 30、p.248
- 96 参考文献 30、p.248
- 97 参考文献 31、pp.545-549
- 98 参考文献 31、p.547
- 99 参考文献 31、p.548
- 100 参考文献 31、p.548
- 101 大正 9(1920)年に鉄道院から昇格。
- 102 参考文献 32、pp.73-75
- 103 参考文献 34、p.143
- 104 参考文献 35、pp.135-136
- 105 参考文献 36、p.117、p.317
- 106 参考文献 37、PREFACE
- 107 参考文献 38、p.2
- 108 参考文献 38、p.3
- 109 日本航空輸送(株)、10 年史による
- 110 参考文献 39、付録地図
- 111 参考文献 40、PREFACE

(参考文献)

1. 『旅行の進化論』、ヴィンフリード・レシュブルク著、林龍代/林健生訳、青弓社、1999
2. *Lonely planet Japan*, Lonely Planet Publications Pty Ltd ,2011
3. *The Green Guide to Japan* , Michelin Apa Publications Ltd ,2010
4. *Eyewitness Travel Guides Japan*, Blue Island Publishing Limited, 2005
5. 『観光資源台帳』、(財)日本交通公社編、(財)日本交通公社、2000
6. 『美しき日本』、(財)日本交通公社編、(財)日本交通公社、1999
7. 『『フジヤマ』の呼称の発生から定着に至る過程についてー富士山はなぜ『フジヤマ』と呼ばれるようになったかー』、上田卓爾、大阪観光大学紀要第 12 号、2012
8. 「明治初期における日本初の外国人向け旅行ガイドブック」、長坂契那、慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要(69)、2012
9. *Information for Travellers Landing in Japan* , Thos. Cook & Son Yokohama, 1914、90 頁の小冊子、上田所蔵

10. 『明治・大正家庭史年表』、下川耿史編、河出書房新社、2000
11. 『チェンバレンの明治旅行案内』、楠家重敏訳、新人物往来社、1988
12. *Things Japanese*, B. H. Chamberlain, J. L. Thompson & Co., Ltd., Kobe, 1939、
13. *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan*, E. M. Satow & A. G. S. Hawes, Kelly & Co., 1881、横浜開港資料館蔵
14. *A Handbook for Travellers in Central & Northern Japan second edition*, E. M. Satow & A. G. S. Hawes, John Murray, 1884、横浜開港資料館蔵
15. 『日本鐵道略年表』、鐵道省、1942
16. 『鐵道 80 年の歩み』、日本國有鐵道、1952
17. *A Handbook for Travellers in Japan third edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1891、横浜開港資料館蔵
18. *Noto, an unexplored corner of Japan.*, Percival Lowell, The Riverside Press, 1891(邦訳『能登・人に知られぬ日本の辺境』宮崎正明訳、能登印刷、1981)
19. *A Handbook for Travellers in Japan fourth edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1894、横浜開港資料館蔵
20. *A Handbook for Travellers in Japan fifth edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1899、横浜開港資料館蔵
21. *A Handbook for Travellers in Japan sixth edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1901、横浜開港資料館蔵
22. *A Handbook for Travellers in Japan seventh edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1903、横浜開港資料館蔵
23. *A Handbook for Travellers in Japan eighth edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1907、横浜開港資料館蔵
24. *A Handbook for Travellers in Japan ninth edition*, B. H. Chamberlain & W.B. Mason, John Murray, 1913、国立国会図書館蔵
25. *TO NIPPON, THE LAND OF THE RISING SUN*, WILSON LE COUTEUR, Nippon Yusen Kaisha, 1899、上田所蔵
26. *Handbook for Tourists in Japan*, Oriental guide society, 1903
27. 『回顧録』、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、1937
28. *A Useful Notes and Itineraries FOR TRAVELLING IN JAPAN*, THE WELCOME SOCIETY OF JAPAN(KIHIN-KAI), 1905
29. 『〈決定版〉正伝・後藤新平』、鶴見祐輔、藤原書店、2005
30. *AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA Vol. 3*, THE IMPERIAL JAPANESE GOVERNMENT RAILWAYS, 1914
31. *TERRY'S GUIDE TO THE JAPANESE EMPIRE*, T. PHILIP TERRY, HOUGHTON MIFFILIN COMPANY, 1930

32. *POCKET GUIDE TO JAPAN*, JAPANESE GOVERNMENT RAILWAYS/ JAPAN TOURIST BUREAU/ JAPAN HOTEL ASSOCIATION, 1925、上田所蔵
33. *Fascinating Features of Fair Japan*, Japanese Government Railways, 1930、上田所蔵
34. *AN OFFICIAL GUIDE TO JAPAN*, Japanese Government Railways, 1933、金沢大学附属図書館蔵
35. *The LURE of JAPAN*, 秋元俊吉著、Board of Tourist Industry、1934、上田所蔵
36. *We Japanese*, FUJIYA HOTEL, LTD, 1949 の 3 巻を含めた 1964 発行の合本、上田所蔵
37. *POCKET GUIDE TO JAPAN*, Board of Tourist Industry, 1935、上田所蔵
38. *HOW TO SEE KANAZAWA and Environs*, Japan Tourist Bureau, 1936、上田所蔵
39. *JAPAN FOR THE YOUNG*, Board of Tourist Industry, 1937、上田所蔵
40. *PETIT GUIDE DU JAPON*, Direction Generale du Tourisme, 1939、上田所蔵